

サンクトペテルブルグ東洋古籍文献研究所（旧東洋学研究所） 所蔵の交易帳簿について

ワジム・クリモフ

サンクトペテルブルグ東洋古籍文献研究所（以下、「研究所」とする）のアーカイヴに所蔵される二冊の帳簿（「大福帳」A147、「簾貸帳」A148）は、重要な歴史資料と考えられる。ロシアの日本学研究に大きな貢献をしたペトロヴァとゴレグリヤドは、研究所に所蔵される日本写本・木版本目録を作成した。二人はともに現在の世代の日本学者を育てた学者である。彼らの作成した目録には、「大福帳」（A147）について、二四の場所、一八三人の買い手、「簾貸帳」（A148）については、借り手二四名の記載がある、と記されている。さらに彼らは、借り手の名前から、彼らはアイヌ人と推測される、としている。唯一の誤りは、島の名称を、サハリンではなく北海道としたことである。ペトロヴァとゴレグリヤドは、その二冊の帳簿を北海道の南部のものであるとしている。実際には、帳簿に記されているすべての地名はサハリンの南部のものである。

二冊の帳簿は一八六四年にアジア博物館（研究所の前身）に収蔵されたM・ブロッセのコレクションの一部とみなされている。その帳簿の来歴を明らかにするためには、すべての東洋諸国に関するコレクション、特に日本に関するコレクションの形成過程を検討しなくてはならない。

研究所の東洋諸国の写本と木版本のコレクションは、ロシアで最大のものであり、世界的にも有数のものである。そのコレクションは、失われた言葉を含め六五か国語、一〇万点に及ぶ。日本のコレクションは、

エカチエリーナ二世の時代にはじまる。彼女は一七九一年と一七九五年、ロシア科学アカデミーに日本製品のコレクションを寄贈したが、そのなかには写本も含まれていた。そのコレクションはオランダ東インド会社の医師であるシュテュツェルから贈物として受け取ったものである。さらに彼女は、大黒屋光太夫から書籍も受け取っている。

一八一八年、アジア博物館が設立された。その際、アジア博物館のコレクションには、二九点の日本の写本と木版本が存在していた。

さらに、長い間外務省に勤務し、中国語を研究していたシリング・フォン・カンシュタット（一七八六―一八三七）は、一八三六年と一八三八年に二つのコレクションを寄贈している。有名な中国学者、ピチュエリは中国語・満州語・日本語・朝鮮語の写本・木版本のコレクションの目録を作成した。

アジア博物館の館長であるフリスチアン・フレン（一七八二―一八五一）は多くの功績があった人物であるが、一八三三年、ロシア帝国の財務大臣であるイゴール・カンクリン（一七七四―一八四五）に対し、ロシア帝国の東洋諸国に勤務するすべての総領事・領事に典籍の購入をその任務の一つとし、その費用を毎年国庫から支出することを願った。

一八四四年に次の財務大臣フョードル・ブロンチェンコ（一七八〇―一八五二）は、廻状によってそれを命じた。その命令は第一次世界大戦まで有効であった。ロシアの外交官の努力によって、アジア博物館のコレ

クシオンは充実を続けた。初代の駐日領事ゴシケーヴィチも、日本典籍の購入の任務を負っていた。ゴシケーヴィチの個人的コレクションは、一九一〇年に寄贈された。

一八三七年、フランス人、マリイ・プロッセ（一八〇二～一八八〇）は、アジア博物館で勤務を始めた。彼は、東洋諸国文学の研究の弱点を補うため、文部大臣であり、ペテルブルグ科学アカデミー総裁であるセルゲイ・ウヴァーロフ（一七八六～一八五五）の招待によって、ペテルブルグにやってきた。プロッセはバりに生まれ育ち、中国語を勉強し、続いてグルジア語とアルメニア語を学習した。それまで学習者がいなかったからである。その後ロシア語も学習した。ロシア帝国のサンクトペテルブルグに来た後は、探検隊に参加し、アルメニア語のコレクションをもたらし、彼の力によって、極めて豊富なグルジア語とアルメニア語のコレクションが形成された。

プロッセは個人的なコレクターではなかったが、いくつかのコレクションの目録を作成した。例を挙げると、アジア博物館の満州語のコレクションの目録も作成した。

アジア博物館の満州語のコレクションを研究したM・ボルコヴァによれば、一〇の蔵書群とプライベート・コレクションから成立している。そこには八〇〇ファイル、五〇〇〇冊が含まれる。一八三五年に、アジア博物館は中国学者であるシェリング男爵の中国語・モンゴル語・チベット語・満州語の写本のコレクションを購入した。そのコレクションの目録を作成したのはプロッセであった。従って、シェリングのコレクションであるにもかかわらず、そのコレクションにはプロッセの名が冠されている。興味深いのは、一八六四年、ロシア帝国外務省アジア局の図書館から、満州語のコレクションが、アジア博物館の図書館に移管されていることである⁽¹⁾。

同時に、一八六四年、プロッセは日本語のコレクションの目録も作成している。先に述べた通り、プロッセは個人的なコレクターではなかったが、日本語のコレクションも同様に外務省アジア局の図書館から移管されたという推測が成り立つと考えられる。帰国後調査したいと考えている。

さらに、フヴォストフ指揮下のユノナ号に積まれていた日本物品のリストが、ロシア国立海軍文書館に残されている。そのリストには、「海図と本が納められた小筆筒一点、日本語の文字が記された木の板一点」と記されている⁽²⁾。日本語の本は帳簿ではなかったであろうか。将来的にはさらなる調査を行いたいと考えている。

フヴォストフとダヴィドフの行動についての、オリガ・クリモヴァ作成の年表の抜粋を次に掲げる⁽³⁾。彼らの行動と帳簿の日付を比較することは有用であろうと思われる。

露曆（ユリウス曆）と西曆（グレゴリウス曆）の差は、一九世紀初頭では一二日である。露曆から一二日をひいたものが西曆である。

オリガ・クリモヴァの年表によれば一八〇六年一月六日、サハリン島のアニワ湾に入り、同月一〇日から一九日まで、クシュンコタン（リュボイトストヴォ）に滞在している。日本の曆では文化三年八月末ごろである。帳簿には、その日付以降の記録はない。

海軍文書館所蔵の物品リストには海図の記載もある（単数が複数かは不明）。研究所の目録によればB一六四号に「北海道・サハリン・クリル諸島の海図」が存在する。これも同様に一八六四年のプロッセのコレクションに由来する。二冊の帳簿と同じである。グレグリヤドの目録によれば、この海図が作成された場所と日付は不明である。推測の一つとしては、その海図は帳簿と同様に、ユノナ号から、外務省アジア局図書館を経由してもたらされたものではなかっただろうか。ただし、強調し

年表（日付は露暦）

1806年9月24日	レザノフはオホーツクから出発し、ペテルブルグに向かった
1806年9月24日	フヴォストフはユノナ号でオホーツク港を出航し、サハリンに向かった
1806年10月13日	ルミヤンツェフ商務大臣からレザノフ宛の手紙。貿易樹立の必要性を認めている
1806年10月6日	フヴォストフはサハリン島のアニワ湾に入った
1806年10月7日—9日	最初の停泊地
1806年10月9日—10日	2番目の停泊地（オフィットマリ・スムネニエ）
1806年10月10日—19日	3番目の停泊地（クシュンコタン・リュボピトストヴォ）
1806年10月25日	千島列島を通り、ペテロバプロフスク港へ航路を取った
1806年11月8日	ユノナ号はペテロバプロフスク港に入港
1807年5月4日	ユノナ号とアヴォシ号はペテロバプロフスク港を出航
1807年5月9日	千島列島の第14番島に近づいた
1807年5月18日	択捉島に近づいた
1807年5月19日	ナイボに上陸
1807年5月24日	シャナに到着
1807年5月27日	シャナから出航し、千島列島の第18番島へ航路を取った
1807年5月28日	日本人1人を択捉島で解放
1807年5月31日—6月1日	ウルップ島でズヴェズドチョトフ先導者を探すために1人を海岸へ送った
1807年6月1日	松前へ航路を取った
1807年6月6日	知床岬に到着
1807年6月7日	サハリン島のアニワ湾に入った
1807年6月16日	南へ航路を取った
1807年6月22日	ピク・デラングルで日本の船を焼き払った
1807年6月26日	1隻の船を沈没させた
1807年7月3日	アニワ岬を通った
1807年7月16日	ユノナ号とアヴォシ号はオホーツク港に入港
1807年7月16日	フヴォストフからサハリン宛の報告書。ユノナ号とアヴォシ号はオホーツク港に入港したことについて報告している

ておきたいのはこれは推測に過ぎないということ、さらなる調査が必要である。ペトロヴァとゴレグラヤドの目録によれば、この地図はサンガル海峡からクリル諸島までを含むが、山・川・村・道・海路・貿易地点・距離が記載されている地図である。緯度・経度は記入されていない。サハリンは正しく記載されておらず、西から東へ伸びている。サハリンでは「コタントル」と「シロトコ」まで、クリル諸島ではウルップまでの記載がある。海図の左側に説明文がある。

アイヌ人との貿易は次の通り行われた。日本人は春に酒・たばこ・米などを貸し、秋にアイヌ人は鯨・鯨などの商品でそれを返済した。現物の交換であるという点特徴である。返済されると線がひかれ、取り引きは決済される。一見すると帳簿は翻訳しやすいと考えられるかもしれないが、そこには研究上、翻訳上の多くの問題がある。ロシア人にとっては崩し字がまず問題であり、日本人研究者の協力なしには誤りを避けることができない。ここで提示可能なのは、すべて最終的な結論ではなく中間報告である。史料編纂所の研究者の協力によって、研究を進めることができる。藤田覚教授と保谷徹教授、小野助教と松澤助教の尽力によって崩し字が解読された。とくに帳簿の解読は、経済学部アーカイヴズの富善一敏氏の手を煩わせた。ロシア語への翻訳に際しては、単位の問題が大きい。日本でもロシア同様、独自の単位が用いられている。酒、鯨、たばこその他の単位が、現在の単位でどれほどの量なのか、それも問題である。簡単な例を一つ挙げると、海軍文書館所蔵の物品目録には、ユノナ号に、日本製の酒樽四つ、もしくはバケツ一〇〇、という記載がある。これが現在どれだけの量に相当するのかわからない。当時のロシアではバケツの容量は地域によって大きな違いがあった。五リットルから三〇リットルまでのばらつきがあったのである。単位としては一バケツは一二・三リットルであり、一つの樽には四〇のバケツとされている。

た。一九世紀には、バケツはアルコール、液体、植物油の主な単位として使われていた。

単位が正確に確定された後には、貨幣額への換算、利潤率、他の歴史資料のなかでどのような位置にあるのか、この帳簿の固有性と一般性といった点を、将来的には研究し、解決しなければならぬ。日本側の協力なしにこれは不可能である。藤田教授をはじめとする日本側研究者の協力を引き続きお願いしたい。さらに若い世代の研究者がこのプロジェクトの成果に基づき、さらに野心的な研究を進め、日露の共通の過去についての知識を深めることを希望したい。

〔註〕

- (1) М.П. Волкова. Описание маньчжурских рукописей института народов Азии АН СССР. Издательство «Наука», ГРВЛ. М., 1965. С. 3-4.
- (2) РГАВМФ. Фонд 166, опись 1, делo4671. Л.200.
- (3) Кимова Olga Vadimovna. 博士論文「黎明期日露関係におけるフヴェオストフとタヴィドフの遠征」。提出二〇〇八年六月。大阪大学言語社会研究科言語社会専攻。頁二三九―二四一。